

新	時
美術	
評	

近藤誠一

日本の伝統文化の本質は何かと正面から問われても、ひとごとで定義することは難しい。できるのは、「和文化には・・・という特徴がある」という具合に、その属性（の一部）を語ることだ。こうした言葉をいくら並べても言い尽すことはできないが、その過程で日々感じているが言葉になり切らない、いわば「暗黙知」としての和文化の全体像が浮かんでくる。

昨年このコラムで紹介した「日本和文文化グランプリ」主催（一社）日本和文文化振興プロジェクトの2年目の選考委員会が開かれた。11人の審査員が全国から応募された作品をひ

という、素人には思いもよらぬ視点が指摘された。いずれも長い年月をかけ、試行錯誤の末に積み上げられてきた知恵と技の結晶である。

漆芸技法を駆使した作品では、何度も漆を塗り重ねる丁寧さここぞとばかり、そこから出てく

土に返すなどの自然の循環を意識したものである。日本の近世では、サステナブルは当たり前のことだった。茶碗は両手の間での座り心地の良さや飲みやすさなど、また見ぬ使い手のことを一心に考えてつくられているとともに、それを手に取った者が作家のこころを読み取ることで、両者のこころがつながる大事な要の役割を果たしている。

最もここに残ったのは、ある作品は、素材やデザインが表わす簡素な愛らしさの奥に、作り手の美しい心情や願いが込められているだけでなく、それを使う姿も美しく見えるというコメントであった。

伝統文化とは何か

とつひとつ取り上げながら「和文文化グランプリ」に相応しいか否かについて喧々諤々の議論を行ったが、過去2回の審査で出て来た議論は、和文文化のさまざまな属性を見事にい当てていると思われたので、いくつかをご紹介します。

一見簡素な木工芸の家具の評価をしているとき、その木目の美しさ、釘を使わぬ組物（柱頭と梁の接合を強化する仕組み）として最も簡略な「舟肘木」という伝統技術がしっかりと使われていること、そして耐震性の強い構造が評価された。さらにそれは日本座敷で正座したときの目線で観るときに最も美しい

る独特の質感が遺憾なく表現されている。そして内部に施された見事な螺鈿装飾は、真の価値とは「目に見えない」ところにあることを暗示している。

ワイングラスなどについても、単なる現代的なガラス製品であるだけでなく、その足元や底の部分に漆による繊細な模様が使われていることから醸し出される独特な雰囲気、伝統と現代の融合の例として指摘された。

茶碗は、数年寝かせた土を握ねて窯で焼いて作り上げ、自然からもらった釉薬を施し、大切に使い、ひび割れは金継ぎによって華やかに修復するなど、自然素材を利用して、最後はまた

総じていえば、日本の伝統工藝作品とは、日常の用に供することを原則としつつも、便利で機能的な「モノ」であることを目指すのではなく、自然の素材をありのまま使うことで自然が持つ美を奥ゆかしく表現することにより、作り手とまだ見ぬ使い手が、こころのこもった「想い」を交差させる媒体として存在するということがきよう。自然への畏敬の念、移ろい、全体と個のつながりと調和、奥ゆかしさ、妥協を肯んじない拘り、現代生活に浸透する底力などのキーワードが止めどもなく浮かんでくる。

（近藤文化・外交研究所代表）